

2022年11月27日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 12章 38～44節

説教題：ひとり神の前に立つ

私は、作家の三浦綾子さんのお若い頃の講演のCDを最近見つけて、時々聞いています。綾子さんは、講演の終わりで、夫の光世さんのことを褒めます。「彼は『光世』と書いて、逆さに読めば『世の光』です」と言った後、「ああ、こんなこと言うんじゃないかった」と言い、「しかし本当に彼は『世の光』です」とまた言われるのです。それだけ、彼女の人生にとってご主人の存在、というかご主人の信仰というか、それが大きな救いだったのだと思います。綾子さんが本格的に作家活動に入った時、光世さんに「口述筆記をして欲しい」と頼まれたのです。光世さんは、公務員の仕事を止めて口述筆記に専念することにします。多くの人が、仕事を止めることを反対したようです。「奥さんは身体が弱いんだし、作家なんて、いつ書けなくなるか分からないんだから、止めちゃだめだよ」。しかし光世さんは「綾子の仕事は神様の仕事、神様が養って下さいます」と言って、スパッと止めてしまったのです。私はこの話から、『信じる』ということは『信頼する』とことである」ということを学ぶのです。

今日の箇所は、「信じて生きるとはどういうことか」、そういうテーマに光を投げかける個所です。内容、メッセージ、適用、と分けて学びます。

1：内容～人の前の信仰か、神の前の信仰か

「イエス様の最後の一週間」の火曜日の話が続きます。12章 38～40節でイエスは弟子達に「律法学者(律法の教師)についての警告」を語っておられます。律法学者とは、誰よりも律法に精通し、神の言葉に触れている人々でした。その意味で誰よりも信仰的であるべき人々でした。しかし、実際はどうだったのか。イエス様は、彼らの姿を「彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが大好きで、また会堂の上席や、宴会の上座が大好きです」(38～39)と描写しておられます。彼らは「律法の教師」としての立場を誇っていました。それだけなら良いですが、そのプライドによって、他の人を見下げるようになって行くのです。そして人より上にいること、人から一目置かれることを心地よく思う、そうやって行きます。ある律法学者が、顔を歪めて家に帰って来ました。家人が理由を尋ねたら、彼は広場で挨拶を受けましたが、その挨拶は「あなたに豊かな平安がありますように」という挨拶であり、そこに「私の主よ」という言葉が入っていなかった、それで大いに気分を害したというのです。いかに彼らが人から尊敬されることを期待し、当然のことと考えていたかが分かります。さらにイエス様は「また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします」(40)と言われます。律法は「やもめや孤児の権利を守るよう」に教えています。彼らは「あなたの権利を守ってやろう」と言ってやもめの家に入り出したのでしょうか。確かに弁護の務めも果たし、やもめの権利を守ることもしかたも知れません。しかし一方で、その女性たちに「見返り」を求め、利益を貪るようになったようです。イエス様は「彼らのこのような信仰のあり方」を厳しく非難されました。

しかし、他方 41～44節に対照的な「信仰の姿」が描かれます。イエスは神殿の「婦人の庭」と呼ばれる場所に座っておられたのでしょうか。「婦人の庭」には、神殿に献金する人々が献金を捧げるためのラッパの形をした献金箱が13個置かれていました。献金箱には、色々な人々が献金を投げ入れていました。金持ちは、これ見よがしに沢山の献金を投げ入れたかも知れません。そこへ貧しいやもめがやって来て、2レプタ(100円ほど)の献金を入れたのです。それは彼女にとって、生活費の全部だったようです。その姿を見てイエスは「この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました…この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです」(43～44)と言って彼女を称賛されたのでした。

2：メッセージ～神は真実の信仰を祝福される

法学者の問題は何だったのか。イエス様は「山上の説教」—(マタイ 5～7)—の中で「彼らのまねをしてはいけません」(マタイ 6:8)と言っておられます。彼らというのは、律法学者でありパリサイ人です。その「山上の説教」の中に「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい」(マタイ 6:1)という言葉があります。ある英語の聖書は「人に見せるために人前で宗教をしないように気をつけなさい」と訳しています。彼らの問題は、「人を相手にした信仰であった」ということです。彼らは、神に仕えるのではなく、人に一目置かれること、人に仕えられることを喜んだ、自尊心が満足されることを喜んだ。しかもそれは、やがては自分の地位を利用して利得を貪るようになったのです。そこに決定的に欠けているもの、それは「神の前に立つ、神を愛する、神に仕える姿勢」です。彼らの信仰には、「生ける神様」が計算に入っていないのです。

そのことを鮮明に浮かび上がらせるのが、貧しいやもめの姿です。彼女には、宗教を人に見せよう等という思いはない。イエス様が見ておられることすら気づかなかったのです。ここで大切なのは「この女の人は、どうして生活費の全部を献金として捧げたのか」ということです。「福音書」の記述だけでは、良く分かりません。やもめは、人に自分の敬虔を見せようとはしていない。逆に献金額が少ないことを恥ずかしがっている風もありません。恐らく当時の男性優位社会で辛い経験もしていたでしょう。しかし、それを訴えながら悲壮感と共に捧げている風もありません。では、なぜ彼女は生活費の全部を捧げたか。結局、分かりません。分かりませんが、イエス様がなぜ、彼女の献金(信仰の業)をこれほど喜ばれたのか、そこに彼女の献金のことを考えるヒントがあります。

44 節「この女は、乏しい中から、あるだけ全部、生活費の全部を投げ入れたからです」(44)。この「乏しい」という言葉は「貧しいけど、幾らかはある」という貧しさを表す言葉ではない、「何もない」という「貧しさ」を表す言葉のようです。その「貧しさ」の中から生活費の全部を捧げたのです。「生活費」と訳されている言葉(「ビオス」)は、「生涯」とか「命」とも訳される言葉です。そうするとイエス様の言葉は「やもめは極貧の中で命を捧げた」ということになります。どういうことかということ、1人ではやっていけないのです。誰かを信頼し、すがらなければやっていけない。その中で彼女は、誰に信頼を寄せるのか。誰に命を預けるのか。彼女は神を信頼したのです。神に委ねたのです。ある人が言いました。『『愛する』ということは、『愛して下さる方に全てを委ねようとする』こと』である。であれば彼女は、命を懸けて神に信頼し、神に委ねることを通して神を愛したのです。イエスはある時言われました。「一番たいせつなのはこれです。『…心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』…」(マルコ 12:29～30)。ある意味で彼女はこの言葉を生きて見せたのです。命懸けで神に信頼する姿を、イエス様の前に見せた。誰が見ていようが、見ていまいが、神の支配している世界にいたのです。

今日は「信じて生きるとは、どういうことか」というテーマで考えていますが、このテーマで思い出されるのは、デートリッヒ・ボンヘッファーという人です。ナチスが支配していたドイツにあって、ナチスに抵抗した数少ない教会指導者の1人です。優れた神学者でもありました。彼がアメリカに留学していた時、同僚の研究者が「僕は聖人になりたい」と言いました。(カトリック教会では信仰の偉人を「聖人」として列福します)。それに対してボンヘッファーは「僕は信じることを学びたい」と言ったのです。「信仰を持って生きるとはどういうことなのか、それを追求して行きたい」ということです。そして、ナチスの支配するドイツに戻り、大変な社会の中でそれを求め、そして彼が到達した答は、「今日、キリスト者であるということは、祈ることと人々の間で正義を行うこと、その2つのことで成り立つだろう」というものでした。その当時、

「真の祈り」と「正義の行い」が、クリスチャン達の間から無くなっていたのかも知れません。さらに次のようなことも言っています。「信じる者は、(主の言葉に)従順である。従順な者だけが信じる」。「主の御言葉に従っていないければ、本当に信じているとは言えない」と言うことでしょうか。ボンヘッファーは、最後は「平和的な方法ではどうにもならない」と判断して、一部の軍人と協力してヒトラー暗殺を企て、終戦の直前に処刑された人です。その人が、未だに全世界のクリスチャンに影響を与えている、その秘訣は何でしょうか。ボンヘッファーの墓には、「兄弟達の間でキリストの証人であった」と刻まれているそうです。多くのクリスチャンがナチスの宗教政策になびいて妥協して行く中で、ボンヘッファーは、「主はクリスチャンに何を願っておられるのか、どう生きることが主を証しすることなのか、神の栄光につながる事なのか」、そういうことを真剣に求めたのです。「ヒトラー暗殺計画」については賛否両論あります。それはそれとして、ボンヘッファーは、置かれた時代、置かれた環境で、真にキリスト者たろうとした、主に忠実であろうとした、その信仰者としての生き方が、多くのクリスチャンの心を捉えているのではないかと思います。

やもめの姿が私達に教えること、それは「宗教のリーダー達でさえ人間的な満足を求め、自分の利益を求めて、神に仕える姿勢を失っていた、宗教が死に掛かっていた、真に神に仕えることが困難な時代だった、しかしその中で、彼女は、ただ神を信じ、神を愛し、神を信頼し、神に委ねた」ということです。生活費を捧げて、彼女はその後どうやって食べて行くのか…そんなことは(たぶん)「余計なお世話」なのです。というか「なぜイエスが彼女のことを知っておられたのか」、マルコは、それを書きません。でも書かないというよりも、むしろ「神であるイエスが、彼女の献金やその背後の事情について知っていたのは当然のことだろう」と理解していたのではないかと思います。つまり彼女のことは神が知っておられた。生活費を全部捧げた彼女を、神が何らかの方法で、誰かを用いて世話をしてくださった、そのことが、ここには暗に語られているのではないのでしょうか。

ラジオ牧師だった羽鳥明先生の話思い出します。アメリカの神学校で学んでおられた頃、学費が高い、先生はアルバイトに明け暮れていた。しかし、ある時に思いました。「私は神に仕えるために学んでいるのに、やっていることと言えば、金儲けだけじゃないか」。それからアルバイトに使う時間を、神を伝えるために使うようにしました。収入は減りました。しかし、ある日学校に授業料を納めに行くと「あなたの分はもう収められていますよ」と言われたそうです。神様が誰かを使って祝福を注がれたのです。神は、そういうことを為さるお方です。

いずれにしても彼女はここで「私の生きることの全てを御手に委ねます、信頼します」と言って礼拝を捧げたのです。その彼女に、イエス様は大きな励ましを感じられたのではないのでしょうか。イエス様は、これから神に全てを委ねて、神の御心に従って十字架につこうとされています。そのイエス様にとって「神だけを見つめて、神に全てを捧げて、神に応答しようとしている彼女の姿」は、(人間的な言い方をしますが)イエス様に信仰者としての励ましを与えたのではないのでしょうか。

3: 適用～置かれた時代、置かれた場所で、真の信仰に生きる

もう1つボンヘッファーの言葉を紹介します。彼は言います。「1人になることが出来ない人は、交わりに入ることに気をつけなければならない」。交わりは楽しいし、有り難いし、素晴らしいものです。ある人が言いました。「信仰は、知識を積み重ねて行って徐々に成長して行くものではない、それは、神によって、また交わりによって引き上げられて行くものである」。私も兄弟姉妹の信仰の姿から、どれだけ沢山のことを学ばせて頂いているか、どれだけ多くの信仰の励ましを頂いて来たか分かりません。その意味でも教会の交わりは素晴らしい。しかし素晴らし

いだけに、うっかりすると「交わりの中に身を置くことで、信仰生活をしているような気になってしまう」危険があると思うのです。「1 ヨハネ」に「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」(1 ヨハネ 1:3)とあります。信仰者の交わりの基本は、御父と御子と御霊の「三位一体の神」が持つておられる豊かな交わりの中に、私達 1 人ひとりが入れられて行くことです。私達にとってまず大切なのは、信仰を「(律法学者のように)人との関係」で行うのではなく、「神との関係」で行うことです。1 人で神の前に出て、神との 1 対 1 の何にも妨げられないような関係を持つことです。結果として、その人の神への信仰(神との関係に生きる姿)は、横にいる 1 人 1 人の信仰を励まして行きます。私達の信仰に力を与え、感化を与え、信仰を学ばせてくれるのは、その人の信仰の姿、神との交わりの姿、神との関係に生きている姿です。

「神との関係において信仰をする」とは、大げさに聞こえるかも知れませんが、要は、神は私に何を望んでおられるのか、どうすることを喜んで下さるのか、それを大切に生きることではないかと思うのです。

「ボンヘッファーは、キリスト者として生きることが困難な時代に道を求めた」と申し上げました。この寡婦もまた、神に仕えることが困難な時代に生きたのでしょう。今の時代はどうでしょうか。私は—(何度もお話ししますが)—森繁昇さんの話を思い出します。彼がサウスタコタをドライブしている時、「ここで生まれて、生活していたら、どうだっただろう」と思っことがあったそうです。その時、神の声が聞こえて来ました。「私は、お前をここに生まれさせていない。日本に生まれさせたのだ」。別の時、佐渡島に行った時、彼はそこで切支丹殉教の碑を見たのです。その時、彼は思うのです。「私がこの時代に生きていたら、信仰を守って殉教できただろうか。それとも信仰を捨ててしまっただろうか」。その時も、彼の心に響く神の声がありました。「私は、お前をあの時代に生まれさせていないのだ。今の時代に生まれさせたのだ」。彼は思いました。「それは不公平じゃないですか。あの頃の人には命を賭けました。私は命を賭けていません」。そうしたらまた声がありました。「私に従って来るのは、あの時も今も、同じだけ難しい。私に信頼する人だけが出来るのだ」。彼は、普段の生活で神に従うことの難しさ、従っていない自分の姿を思い巡らして、神の声に納得するのです。私達が信仰者として生きるように召されているのは、この時代、この場所です。私達はここで「神を信じて生きるとはどういうことなのか」、キリスト者としての道を求め、少しでも神に喜ばれる信仰生活を営んで行きたいと願います。それは結果として私達に、また信仰の仲間に、信仰生活の祝福をもたらすに違いありません。